

「根を張ってこそ花が咲く」信条に20年



四季文化館みの〜れ 前館長

やま ぐち しげ のり
山口茂徳さん

みの〜れと共に生活するスタイル
Minole Life
のすすめ No.200

「みの〜れライフのすすめ」は今回で200号を迎えました。次々と現れる「みの〜れライフ」を満喫している人たちに毎月元気をいただいています。今回は200号を記念して、みの〜れ館長として約20年間尽力され、住民と一緒に汗を流し、笑い、悩み、いつも温かな眼差しで見守り、関わる人たちのやる気を引き出してきた、山口茂徳みの〜れ前館長にインタビューしました。

青春とは燃えることだ

農業経営者の山口さんらしく「根を張ってこそ花が咲く」を信条に掲げ、文化の土を耕し、立派な根を張った、約20年間を振り返ってお話しいただきました。

「無我夢中だった」と山口さん。館長として心がけていたことは「全員参加」。当時、四季文化館企画実行委員会の会議が半数程度の出席率で課題となっており、就任直後の山口館長は委員一人ひとり訪ね歩き、ひびきを突き合わせて話をして、全員出席が実現。住民同士、住民と職員が信頼関係で結ばれる館になっていきました。

みの〜れの強みは「ボランティアや企画集団など多様なチームが14もできて、しっかりと裾野が広がってきたこと」と山口さん。全国各

地から山ほど視察が来ても「簡単に真似できない」と言いつて帰るところがほとんどだったそうで、なぜみの〜れでは実現できているかと言えば「住民と職員、双方の熱意と努力の賜物です。特に、職員が住民と志を共にし、全国から新たな知見を得ながら内部に刺激をもたらしたことが大きい」と山口さん。そして、住民と職員が両輪として相乗力を発揮するために不可欠なのが、山口さんがみの〜れに根づかせた「対話の文化」と専門家は分析しています。

「対話の文化」とは、いろんな職種や立場の人たちが集まり、それぞれ違う考え方を一旦受け入れ、対話を重ねて協調し、チームとして相乗力を発揮できるようにすること。山口さんの手ほどきで、毎晩のように行われるみの〜れの企画会議を通して住民や職員に浸透していき

ました。プロジェクトを立ち上げるときは軸になる3人はいるか。チームは6〜8人で男女混合にすること。傾聴の姿勢で納得するまで意見を聴き合い、決議方法を全員で決め、決まったら自分の意見と異なる結果でも必ずこれを全員で守る。これがみの〜れで育まれている「対話の文化」です。

山口さんは「青年団活動を通して体得したことが大きい」と語ります。「青年団時代の社会教育主事の先生が『青春とは燃えることだ』と言っていました。そして、感動が人の心を動かし成長させることも学びました。みの〜れは、これからも多くの人々が感動を味わえるホールであって欲しいです」。

いつも家族のように優しく包んでくださった山口さん。これからも変わらさずご支援ください。(藤田佐知子)